

## 聖書主義の盲点

— 聖書解釈における他者性の認識 —

小林 昭 博\*

### The Blindness of Biblicism — The Knowledge of Alterity in Biblical Interpretation —

Akihiro KOBAYASHI\*  
(Accepted 7 December 2015)

#### 1. はじめに — 聖書主義の問題

「聖書主義」<sup>1)</sup>を標榜するプロテスタンティズムにおいては、自らの見解を言い表すさいに、その根拠として聖書テキストを引用することが常となっている。聖書テキストを引用する者は、自覚的にせよ無自覚的にせよ、自らの見解とその引用するテキストとが同一の内容を言い表していると理解しているからこそ、そのテキストを引用するのである。良く言えば、そこには引用者とテキストとのあいだの解釈学的対話が成立しているとも考えられるのだが、悪く言えば、聖書テキストを盾に取り、自分自身の意見を正当化しているとも考えられる。

後者の場合、聖書テキストの引用というものが、単なる我田引水でしかないことは明らかだが、前者の場合もまた、テキストの恣意的な抽出引用であるとの批判は免れない。このように考えると、「聖書のみ」に立脚し、聖書の規範性を主張する聖書主義というものが、常に聖書から発して聖書に立ち返り、

あらゆる物事を聖書に基づいて考え行動しているというのは、— 当然のことながら — あくまで建前でしかないということが明らかとなる。すなわち、聖書主義が表面的には聖書の規範性を主張し、聖書の権威に服しているかのように振る舞っているようでありながら、その実は聖書を我がものとし、聖書を自らの足下に服させているということである。

したがって、聖書解釈においても、テキストからその意味を「引き出す解釈」(Exegese)をするのではなく、自分の立場や考えをそのテキストに「読み込む解釈」(Eisegese)をしてしまっており、それゆえテキストと読み手(解釈者)とのあいだに存在する越えることのできない深淵、すなわちテキストの「他者性」(altérité)が認識されていないという問題が炙り出されてくると考えられるのである。

そこで、本論文では、「聖書のみ」というプロテスタンティズムの聖書原理を再考し、聖書を「規範化する規範」としてではなく、ひとつのテキストとして読み解く可能性を探り、そこからさらに、他者性をめぐるテキスト理論を概観しつつ、聖書主義がテキストと解釈者とのあいだに存在する「他者性」を忘却している問題性を検討することを通して、聖書解釈における他者性の認識の有用性を論じることを試みたい。

#### 2. ひとつのテキストとしての聖書 — 「規範化する規範」から「規範化された規範」へ

##### 2.1. 戦略としての「聖書のみ」

— ルターの聖書原理

プロテスタンティズムの聖書原理として知られる「聖書のみ」(sola scriptura)の立場は、ローマ・カ

<sup>1)</sup> 本論文における「聖書主義」とは、プロテスタンティズムの聖書原理である「聖書のみ」(sola scriptura)を標榜する立場を広義の「聖書主義」と呼ぶものであり、18-19世紀のドイツで興隆した狭義の「聖書主義」(Bibliismus)を指すものではないということを予め断っておく。もっとも、近代ドイツの聖書主義が、(1)聖書を神の教説の法典と見なす「理論的・教条的聖書主義」、(2)聖書を個人と共同体の生活のための宗教的・道徳的規則の集成と見る「実践的・綱領的聖書主義」、(3)聖書を人類の歴史を形成する神の歴史の概要と解する「救済史的聖書主義」の三種類に大別されるとする通説に従えば(E. Schott/G. Gloege, Art. Bibliismus, <sup>3</sup>RGG I (1957), 1263), 本論文で用いる「聖書主義」は(2)の流れを汲むものだと考えているであろう。

\* 酪農学園大学農食環境学群循環農学類キリスト教応用倫理学研究室

Christian Studies and Applied Ethics, Department of Sustainable Agriculture, College of Agriculture, Food and Environment Sciences, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

トリックの「聖書と伝承」(scriptura et traditio)の立場に対する宗教改革時代の批判的戦略として用いられたものである。しかしながら、「聖書のみ」というプロテスタンティズムの聖書原理は、16世紀にマルティン・ルターやその同時代人が最初に創出したものではなく、13世紀にスコラ神学者のドミニコ会士トマス・アクィナスもすでに用いていた表現であった<sup>2)</sup>。すなわち、その『ヨハネ福音書注解』において、トマスは「正典的聖書のみが信仰の規準である」(sola canonica Scriptura est regula fidei)<sup>3)</sup>と述べているのである。

したがって、「聖書のみ」というプロテスタンティズムがアイデンティティとしてきた聖書原理が、ローマ・カトリックから「天使的博士」(Doctor Angelicus)の称号を与えられたスコラ学最大の学者トマス・アクィナスに依拠していたということが窺われるのである。つまり、プロテスタントがローマ・カトリックと決別するうえでの旗印である「聖書のみ」が、ローマ・カトリック最大の神学者からの借物だったということである。

しかし、ルターの「聖書のみ」は、トマスからのたんなる借物だったわけではない。ルターとその同僚であるアンドレアス・カールシュタットとが、ローマ・カトリックのイデオログであるイヨハン・エックと討論したライブツィヒ論争において、エックが教皇権を神から発した最高権威とする「教皇首位権」(primatus papalis)を主張したのに対して、ルターは聖書こそが最高権威であると主張したのである。すなわち、ルターの「聖書のみ」の主張は、何らかの新たな教理を作成することを主眼とするものだったのではなく、ローマ・カトリックの教皇権に対する抵抗<sup>プロテスタント</sup>を目的として、教皇権を相対化するために新たな絶対的権威を呈示するというきわめて巧妙な戦略に彩られたものだったと考えられるということである<sup>4)</sup>。

<sup>2)</sup> Heinz Liebing, Sola Scriptura. Die reformatorische Antwort auf das Problem der Tradition, in: Carl-Heinz Ratschow (Hrsg.), *Sola Scriptura. Ringvorlesung der theologischen Fakultät der Philipps-Universität*, Marburg: N. G. Elwert Verlag, 1977, 81; Stephan H. Pfürmer, Das reformatorische ‚Sola Scriptura‘. Theologischer Auslegungsgrund des Thoma von Aquin?, in: Ratschow (Hrsg.), *ibid.*, 55.

<sup>3)</sup> Thomas Aquinas, *Super Evangelium S. Joannis Lectura*, cap. 21, lect. 6, nr. 2659.

<sup>4)</sup> ルターの「聖書のみ」とは、彼自身の表現によれば、「聖書のみが支配する (solam scripturam regnare)」というものだが(佐藤敏夫『キリスト教神学概論』新教出版社, 1994年, 46頁), より厳密には、「もし敵対者たちが聖書をキリストに反して主張するならば、わたしたちはキリ

## 2.2. 「規範化する規範」から「規範化された規範」へ

プロテスタント神学では、聖書は「規範化する規範」(norma normans)として位置づけられ、信条や教理は「規範化された規範」(norma normata)として理解されている<sup>5)</sup>。つまり、信条や教理は聖書によって定められたものであり、それ自体絶対ではないのに対して、聖書はあらゆるものの「規範」(norma)であるがゆえに絶対であり、神学論争時の唯一絶対の規準としての「規範的権威」(auctoritas normativa)として位置づけられているということである。

このように聖書を「規範化する規範」として絶対化する聖書理解に対して、プロテスタントの牧師である久保田文貞は、「聖書を『規範化する規範』でなく『規範化された規範』として、さらに『規範』自体を歴史的批判のレベルにおいて、そして諸文書・諸伝承を現実の社会状況を生き、その中で葛藤している人間の記録として、対話しつつ読む<sup>6)</sup>」ことを提案する。久保田が言うように、聖書は「規範化する規範」ではなく、「規範化された規範」でしかありえず、それは教会が歴史のただなかで自ら正典を定めたという歴史的事態を言い当てるものであり、そのことはことに新約聖書正典成立史を繙けば了解されることなのである<sup>7)</sup>。

ストを聖書に反して主張しよう (Quod si adversarii scripturam urserint contra Christum, urgemus Christum contra scripturam)」(Martin Luther, De fide, thesis 49, in: WA 39/1, 47)というものである。したがって、ハインリヒ・カルプの次の言葉は、ルターの「聖書のみ」の立場の核心を突いている。「《キリストのみ》なくば《聖書のみ》はなし! (Kein „sola scriptura“ ohne „solus christus“!)」(Heinrich Karpp, *Schrift, Geist und Wort Gottes. Geltung und Wirkung der Bibel in der Geschichte der Kirche: Von der alten Kirche bis zum Ausgang der Reformationszeit*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1992, 156)。

<sup>5)</sup> ホルスト・G・ペールマン『現代教義学総説』蓮見和男訳, 新教出版社, 1982年, 57頁は, norma normans と norma normata という「この概念を最初に用いたのが誰か, 私は見つけだすことができない」と述べている。

<sup>6)</sup> 久保田文貞「1998年度京都教区性差別問題特設委員合宿——『同性愛者は牧師になれない』のか?——発題」1999年3月28-29日のレジュメの2頁から引用。

<sup>7)</sup> 青野太潮『どう読むか聖書』(朝日選書490)朝日新聞社, 1994年, 227-259頁, 同『最初期キリスト教思想の軌跡——イエス・パウロ・その後』新教出版社, 2013年, 821-832頁, 田川建三『書物としての新約聖書』勁草書房, 1997年, 1-197頁, 上村静『旧約聖書と新約聖書——「聖書」とはなにか』(シリーズ神学への船出02)新教出版社, 2011年, 44-53頁参照。

### 2.3. ひとつのテキストとしての聖書

#### —「規範化された規範」としての聖書

正統主義教会が新約聖書正典を制定した最大の動因ないし動機は、正統主義が異端と見なす者たちを排除するためであったことは新約聖書正典成立史からも明らかだが、そのさい「使徒的」ということが新約聖書正典制定に対して正統主義教会の「規範」としての役割を担っていたと言えるのである<sup>8)</sup>。したがって、正統主義教会が自らを「正当化＝正統化」するための戦略そのものが新約聖書の規範性だと言っているのである。それゆえ、プロテスタント神学が聖書は「規範化する規範」であるといくら熱弁を揮っても、少なくとも新約聖書は「使徒的」という「規範」をはじめとする正統主義教会の戦略によって正典として制定された「規範化された規範」でしかありえないことは明らかである。

如上の聖書が「規範化された規範」であるとのテーゼは理論的には覆しえないので、このテーゼに反証を加えることは不可能である。しかし、冷静に考えれば、聖書が「規範化された規範」である信条や教理のみならず、あらゆる思想やイデオロギーからも完全に自由な「規範化する規範」などではありえず、外在的「規範」によって制定された「規範化された規範」でしかありえないということは了解可能である。したがって、聖書を「信仰の規準」(regula fidei = canon)である「規範的権威」(auctoritas normativa)とする見解はひとつの立場でしかありえず、聖書もまた他のテキストとまったく同じひとつのテキストとして<sup>9)</sup>、解釈の俎上に乗せられてしかるべきだと言っているのである<sup>10)</sup>。

<sup>8)</sup> 詳しくは、田川『書物としての新約聖書』140-173頁参照。

<sup>9)</sup> その意味において、大貫隆の次の指摘は至当である。「聖書の文書はどれも、歴史のどこかで、労苦して人間によって書かれたものなのである。そのことを見るためには、聖書のように『神さまが書かれたもの』などと言われることがない一般の書物と同じく、普通の態度で読むことが必要である」(大貫隆『聖書の読み方』(岩波新書 1233)岩波書店、2010年、92頁)。

<sup>10)</sup> 聖書をひとつの文学テキストとして読むという場合には、預言文学、黙示文学、福音書文学や書簡文学といった聖書各文書の文学ジャンルに添った解釈が必要だと考えられているが、ジュリア・クリステヴァ『テキストとしての小説』(ポリロゴス叢書)谷口勇訳、国文社、1985年)が、小説の登場によって神話や叙情詩が消失してしまったと指摘するように、聖書の文学ジャンルそのものを再吟味することも必要であろうか。もしかすると、聖書テキストをひとつの文学テキストとして、小説のように読み直すということも必要かもかもしれない。その意味では、ウンベルト・エーコ『開かれた作品』篠原資明／和田忠彦訳、青土社、1997年、339-365頁所収の「補遺 エデンの園の言語における美的メッセージの生成」は、

### 3. テキストの他者性の認識

#### 3.1. 循環的解釈の問題——神学の教理的解釈と哲学の独我論／独話

キリスト教神学において、聖書を教理的に解釈するということは、神学的解釈として、一見妥当な解釈学的手続きであると信じられている。しかしながら、「規範化する規範」である聖書を、その聖書から導出された「規範化された規範」である教理によって解釈するというのは、ひとつの聖書テキストをその同じ聖書テキストによって解釈するのと同じことであり、それは謂わば循環的解釈とでも名づけるものだと言えるのである。

すなわち、教理が「規範化された規範」であるとの教理に従えば、教理にはその「規範」となる聖書テキストが必ずあるのだから、その教理がその「規範」である聖書テキストと符合するのは当然であり、その教理によってその「規範」となる聖書テキストを都合良く解釈できるのは、それが循環的解釈である以上、あたりまえである<sup>11)</sup>。要するに、教理的解釈とは、「規範化された規範」によって、「規範化する規範」を解釈するという循環的システムのなかでの堂々巡りだということである。

しかし、循環的解釈の問題性は何も偏に神学だけの問題ではなく、従来の哲学そのものが抱えてきた問題性でもある。柄谷行人の表現を借りると、その問題性とは「他者の不在」ないし「対話の喪失」である<sup>12)</sup>。つまり、従来の哲学は弁証法に明瞭に立ち現れているように、他者との対話ではなく、自己自身のなかで完結した「独我論／独話」を繰り返す循環的解釈だったからである。

#### 3.2. 他者性の認識——ミハイル・バフチン、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン

しかし、この問題はすでに言語哲学の領域において、ロシアの文学理論家ミハイル・バフチンがその炯眼によって指摘していたことであつた。すなわち、

エデンの園の物語を芸術記号論の観点から分析しており、極めて刺激的な読みを提供してくれている。なお、聖書を文学テキストとして読解する試みとしては、ジャン・L・スカ『聖書の物語論的読み方——新たな解釈へのアプローチ』佐久間勤／石原良明訳、日本キリスト教団出版局、2013年がある。

<sup>11)</sup> 高橋敬基「共鳴現象としての聖書の読み行為」『アレテイア』6号、日本基督教団出版局、1994年、12頁が、同様の問題を指摘している。

<sup>12)</sup> 柄谷行人『探求 I』(講談社学術文庫 1015)講談社、1986年、各所を参照。

バフチンはソシュール言語学<sup>13)</sup>を「主観的言語学」と呼んで批判し、言語を対話において「他者」に語るることとして捉え直したのである<sup>14)</sup>。

そして、そのドストエフスキー論において、バフチンはドストエフスキーの小説を「対話的小説」として位置づけ、「他者の反応、他者の言葉、他者の返答」が存在する他者との対話をもつテキストのなかに、主人公の唯一不変の声ではなく、作者も含まれる多様な登場人物たちから織りなされるテキストの「多声性」を見るのである<sup>15)</sup>。ここには「近代においてモノログ原理が強化され、それが思想活動のあらゆる領域に浸透してきたことに力を貸したのは、単一で唯一の理性を崇拜するヨーロッパの合理主義、とりわけ啓蒙主義時代の思潮である」<sup>16)</sup>とのバフチンの批判がいかに発揮されている。

また、同様の問題はルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの言語哲学においても論じられている。ウィトゲンシュタインは言語を「話す／聞く」関係ではなく、「教える／学ぶ」関係として捉え、「外国人」や「子ども」に言語を教える場合を想定し、そこには共通の規則は前提しえないゆえに、共通の規則は言語ゲームのなかで事後的に確認されるに過ぎないと言うのである<sup>17)</sup>。つまり、このような関係性のなかには、共通の規則が前提されていないがゆえに、「他者性」が存在していると言っているのである。

しかしながら、この他者性が「外国人」や「子ども」に対してのみ妥当するなどと考えるわけにはいかない。なぜなら、他者性とは自分とは異なる言語ゲーム、異なる規則、異なる共同体に属する者とのあいだにおける通約不可能な関係性のことだからである<sup>18)</sup>。

### 3.3. テキストの脱構築 — ジャック・デリダ

そして、かかる思想を現代において究極まで理論化したのがジャック・デリダその人である。デリダはヘーゲル＝マルクスの世界認識を脱構築すること

で西洋形而上学に根源的な否を突き付けたのである。まず、彼はその批判の嚆矢として、ヘーゲルを継ぐ西洋形而上学としてフッサール現象学<sup>19)</sup>を「音声中心主義」として批判し、解釈者はそのテキストの著者が意図した本来の意味なるものに遡源することなど不可能である、との認識批判という新たな理解を呈示したのである<sup>20)</sup>。

さらに、彼の批判の鋒先はソシュールへと向けられ、ソシュール言語学<sup>21)</sup>が有する音声中心主義を批判し、言語におけるシニフィエの現前性を斥けたのである<sup>22)</sup>。その後もデリダはシニフィエが「差異の戯れ」の内部の連鎖のなかに刻み込まれていることを曝き出し、「差異の戯れ」に「差延」(différance)という新造語を充て、意味の現前性や一意対応的な言葉の意味という西洋形而上学の主導原理である「ロゴス中心主義」を脱構築したのである<sup>23)</sup>。

デリダによってテキストには著者が意図した唯一の意味があるとの幻想のみならず、言語に一意対応的な意味が現前するとの幻想もまた脱構築されてしまったのである。なぜなら、「テキスト」(言語)の「書き手」(語り手)にとっても「読み手」(聞き手)にとっても、「言語」(テキスト)およびその意味は、すでに、常に、そして永遠に、「差延」の動きに曝されているからである。

### 3.4. アメリカの脱構築批評 — ポール・ド・マン、ジョーゼフ・ヒリス・ミラー

デリダの脱構築思想の受容に伴い、テキストには著者が意図した唯一の意味がある、との従来の解釈に対する批判的読解の作業が多様な相貌をとって立ち現れた。直接デリダの影響を受けたアメリカのイェール学派の「脱構築批評」(deconstructive criticism)では、テキストに必然的につきまとう「両義性」「論理矛盾」「アポリア」などをそのまま受け入れ、テキストを「読み手」(解釈者)の一方的意志によって、テキストがヘーゲル的な統一原理に掠め取

<sup>13)</sup> フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』小林英夫訳、岩波書店、1972年。

<sup>14)</sup> ミハイル・バフチン『マルクス主義と言語哲学 — 言語学における社会学的方法の基本的問題』(改訂版)桑野隆訳、未来社、1989年参照。

<sup>15)</sup> ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの詩学』(ちくま学芸文庫)望月哲男・鈴木淳一訳、筑摩書房、1995年、435、467頁ほか参照。

<sup>16)</sup> バフチン『ドストエフスキーの詩学』167頁。

<sup>17)</sup> ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン『ウィトゲンシュタイン全集8 — 哲学探究』藤本隆志訳、大修館書店、1976年参照。

<sup>18)</sup> 柄谷『探求I』各所を参照。

<sup>19)</sup> エドムント・フッサール『現象学の理念』立松弘孝訳、みすず書房、1965年＝同『現象学の理念』長谷川宏訳、作品社、1997年、同『純粹現象学への全般的序論』渡辺二郎訳、みすず書房、1979年。

<sup>20)</sup> ジャック・デリダ『声と現象』高橋允昭訳、理想社、1970年参照。

<sup>21)</sup> 上注13参照。

<sup>22)</sup> ジャック・デリダ『根源の彼方に — グラマトロジーについて 上・下』足立和浩訳、現代思潮社、上巻、1971年、下巻、1972年参照。

<sup>23)</sup> ジャック・デリダ『哲学の余白 上』(叢書・ユニベルシタス 771)高橋允昭／藤本一勇訳、法政大学出版局、2007年、31-75頁参照。

られてしまうことを拒否し抜いているのである。

イェール学派の総帥と目されたポール・ド・マンは、テキストの「読解可能性」(readability)ではなく、その「読解不可能性」(unreadability)を希求しつづけ、「読みのアレゴリーは「読解不可能性」を物語っている」<sup>24)</sup>とのテキストに向かうさいの自己の立場を明確にしたのである。

また、イェール学派を代表するひとりであるジョーゼフ・ヒリス・ミラーも、テキストの「論理矛盾」を「論理矛盾」として、「アポリア」を「アポリア」として受け止めることによって、テキストに唯一の意味があるとの読解を斥け、テキストの「読解不可能性」という自己のテキスト論を明示したのであった<sup>25)</sup>。

### 3.5. 作品・作者・テキスト

— ウンベルト・エーコ、ロラン・バルト

また、デリダやアメリカの脱構築批評とは独立して、テキストが作者の意図した唯一の意味という幻想に収斂するものではなく、解釈者の前に開かれていることを明らかにしたウンベルト・エーコとロラン・バルトがいる。

まず、イタリアの記号学者にして変幻自在の小説『薔薇の名前』<sup>26)</sup>の著者でもあるウンベルト・エーコだが、彼は「作品は解釈者に対して開かれている」<sup>27)</sup>との名科白とともに、芸術作品(テキスト)は著者の手を離れ、解釈者の読みに委ねられていることを逸早く指摘したのである。だが、エーコは作品が完全に解釈者の前に開かれているとは見なさず、解釈制限原理によって、解釈秩序の限界を設けているのである。

そのようなエーコに対して、構造主義からポスト構造主義へと華麗にメタモルフォーゼを遂げた後期のロラン・バルトは、根源的なテキスト理論へと歩みを進め、従前のテキスト理論の限界を突破して

いったのである。彼は「作品」(œuvre)に内包された読みに抗う要素を大文字の「テキスト」(Texte)と表記することで、双方が対立することを指摘し、著者に属するのは物質的な意味での「作品」であって、方法論的場であり、生産行為の経験である「テキストは読者のものである」と断言したのである。そして、従来の文学研究を支配してきた、作品を作者の人格と結合させることで、作品を作者に収斂させる解釈に対する徹底した批判として、バルトは作者と作品とに死を宣告したのである<sup>28)</sup>。

### 3.6. テキストの他者性 — バーバラ・ジョンソン、エマニュエル・レヴィナス

しかしながら、テキストが読者のものであるということによって、読者がテキストを完全に把握しきれるということが意味されるわけではない。ド・マンらのもとに学んだイェール学派第二世代のバーバラ・ジョンソンは、「最良のディコンストラクションは、完全な理解とかコンセンサスによってもたらされる心地よい安堵感なるものを粉碎するだろう」<sup>29)</sup>と述べている。別言すると、テキストを読むということは、テキストからの「不意撃ち」(surprise)を喰らうということであり<sup>30)</sup>、テキストがあくまでも通約不可能な他者としてありつづけるということなのである。

そして、ここでミハイル・バフチンが提起した「他者性」の問題が再浮上してくる。かかる問題を現代において最も深く探求した思想家はエマニュエル・レヴィナスである。彼は「他者」(l'autre)ないし「他者性」(altérité)について次のように述べている。「コミュニケーションの挫折は認識の挫折とみなされるのだが、その際、認識の成功がまさに他者の隣接性、他者の近さを廃棄してしまうという点は無視されてしまう」<sup>31)</sup>。つまり、コミュニケーションの成立とは、他者の声を封じ込め、通約不可能な他者を自己同一化のなかに搦め取っているだけだということなのである。

<sup>24)</sup> Paul de Man, *Allegories of Reading: Figural Language in Rousseau, Nietzsche, Rilke, and Proust*, New Heaven/London: Yale University Press, 1979, 77.

<sup>25)</sup> Joseph Hillis Miller, *The Ethics of Reading: Kant, de Man, Eliot, Trollope, James, and Benjamin*, New York: Columbia University Press, 1987 参照。

<sup>26)</sup> ウンベルト・エーコ『薔薇の名前 上・下』河島英昭訳、東京創元社、1990年。なお、日本では小説の翻訳よりも映画が先に公開されたので、ショーン・コネリー主演の映画『薔薇の名前』(ジャン=ジャック・アノー監督、フランス・西ドイツ・イタリア映画、1986年)の方が有名であろうか。

<sup>27)</sup> ウンベルト・エーコ『開かれた作品』篠原資明/和田忠彦訳、青土社、1997年、36頁ほか参照。

<sup>28)</sup> ロラン・バルト『物語の構造分析』花輪光訳、みすず書房、1979年参照。特に同書所収の二論文、「作品からテキストへ」、「作者の死」を参照。また、同『S/Z — バルザック「サラジヌ」の構造分析』。沢崎浩平訳、みすず書房、1973年をも参照。

<sup>29)</sup> バーバラ・ジョンソン『差異の世界 — 脱構築・ディスクール・女性』大橋洋一/青山恵子/利根川真紀訳、紀伊國屋書店、1990年、31頁。

<sup>30)</sup> ジョンソン『差異の世界』26-36頁参照。

<sup>31)</sup> エマニュエル・レヴィナス『固有名』合田正人訳、みすず書房、1994年、164頁。なお、同『時間と他者』(叢書・ウニベルシタス178)原田佳彦訳、法政大学出版局、1986年をも参照。

柄谷行人の表現を借りると、それは共通の規則、ひとつの言語ゲームが閉じられる共同体内部における「独我論／独話」にしか過ぎないということである<sup>32)</sup>。

#### 4. 聖書解釈における他者性の認識

##### 4.1. 教理的解釈における他者性の喪失

###### — 多声性の喪失

バフチンやレヴィナスが理論化した「他者」ないし「他者性」の問題から、先述した聖書の教理的解釈を再考すると、聖書と教理とが異質なものの、すなわち他者として出会い、対話するのではなく、聖書と教理とが同一化することによって「独我論／独話」が繰り返されるということになるのか。すなわち、聖書の教理的解釈というものは、聖書と教理、聖書と解釈者とのあいだにある「他者性」を認識しておらず、それゆえ解釈者と聖書とのあいだには対話が成立していないということである。

また、聖書のなかから「神論」「キリスト論」「聖霊論」「創造論」「贖罪論」「終末論」といった神学的概念だけを「引き出す解釈」(Exegese)は、実際には神学的概念を「読み込む解釈」(Eisegese)でしかなく、聖書というひとつのテキストがあたかも教理のためのものとなり、そこには神学者の「独我論／独話」だけが鳴り響き、聖書というテキストのなかにある「多声性」が失われてしまっているのである。

そして、これは歴史批評を謳う現代の聖書学にも当てはまる問題性であり、例えば新約聖書の諸証言のなかから「ケーリュグマのキリスト」や「史的イエス」を「引き出す解釈」(Exegese)もまた、主役である「キリスト」や「イエス」を「読み込む解釈」(Eisegese)となる危険性を孕んでおり、それが「単一で唯一の理性」(バフチン)<sup>33)</sup>に基づく西洋形而上学的な読みになるとき<sup>34)</sup>、聖書に登場する多様な人たちが織り成す「多声性」を失わせてしまうものとなることが危惧されると言えるのである。

##### 4.2. 聖書主義における他者性の喪失

###### — 高橋敬基の「神の言葉の他者性」の認識

では次に、同様の観点から本論文の主題である「聖書主義」を考察してみたい。本論の最初に述べたよ

うに<sup>35)</sup>、本論文における「聖書主義」とは、プロテスタンティズムの聖書原理である「聖書のみ」を標榜する広義の「聖書主義」を指し、それを狭義の聖書主義に当て嵌めて考えれば、聖書を個人と共同体の生活のための宗教的・道徳的規則の集成と見る「実践的・綱領的聖書主義」の流れを汲むものということになる。

このような聖書主義は、高橋敬基の表現を借りれば、「イエスの出来事を書き記した聖書を文字通り生きる信仰、……〔中略〕……自分の生活の中で聖書の言葉に聴き、従う」<sup>36)</sup>立場だと言えるのだが、この引用につづけて高橋はこの立場に対して次のような警告を発する。「神の言葉が先行するという認識にこの聖書観は立っている。ただ、この認識には落とし穴がある。コンテキストを欠いた神の言葉は、しばしば自己義認、自己正当化として機能する。神の言葉の他者性(距離)が忘れられることによって自分の都合の良い勝手読み、自分の言葉となる危険が付きまとう。神の言葉に批判され突き動かされるのではなく、自分を棚上げにして他人を裁くための錦のみ旗になってしまう危険である」<sup>37)</sup>。

高橋のこの警告は、本論文の冒頭で指摘した聖書主義の問題点とほぼ重なるものである。つまり、「神の言葉の他者性(距離)が忘れられること」とは、聖書主義が「他者性」を喪失しているとの批判であり、それゆえに生じる「自分の都合の良い勝手読み」とは、自分の立場や考えをそのテキストに「読み込む解釈」(Eisegese)にほかならず、そして「自己義認、自己正当化」と「自分を棚上げにして他人を裁くための錦のみ旗になってしまう危険」という物言いは、聖書テキストの我田引水的な引用や恣意的な抽出引用の問題を言い当てたものだと言っているからである。

##### 4.3. 聖書解釈における他者性の認識

###### — ポール・リクールの「テキスト世界との新しい自己理解」

おそらく、高橋は若い日に著した『他者中心性なる神』<sup>38)</sup>以来、聖書解釈における他者性の認識の重要性を思索しつづけてきたのであろう。そして、上述の「神の言葉の他者性(距離)が忘れられる」と

<sup>32)</sup> 柄谷『探求 I』7-20, 202-227 頁ほか参照。

<sup>33)</sup> 上注 16 参照。

<sup>34)</sup> 「単一で唯一の理性」に基づく西洋形而上学的な読みの典型は、ヨハネ神学の「ロゴス・キリスト論」のイエス(キリスト)理解だと言っているであろうか。

<sup>35)</sup> 上注 1 参照。

<sup>36)</sup> 高橋「共鳴現象としての聖書の読み行為」11 頁。なお、引用中の中略は引用者による。

<sup>37)</sup> 高橋「共鳴現象としての聖書の読み行為」11 頁。

<sup>38)</sup> 高橋敬基『他者中心性なる神』(《原点双書》)新教出版社、1973 年。

の批判は、聖書解釈における他者性の認識の重要性を指摘しており、これはバフチンやレヴィナスの言う「他者性」と通底するものである。

さらに、彼は聖書解釈において「神の言葉に批判され突き動かされる」ことの必要性をも指摘しているが、これはジョンソンの言う「不意撃ち」と繋がるものである。すなわち、ジョンソンが言う「不意撃ち」とは、テキストを読むなかで読み手が想像もつかなかった強烈な一撃をテキストから見舞われるという新たな読みの衝撃とそこで経験する読む快楽を享受することにほかならないが、高橋が言う「神の言葉に批判され突き動かされる」ということもまた、聖書テキストから読み手が自己を変えることを迫られる強烈な一撃を見舞われるという新たな読み行為を経験させられることだからである。

そして、このようなテキストと読み手とのあいだにある「他者性」やテキストから読み手が見舞われる「不意撃ち」といった新たな読み行為は、ポール・リクールが「テキストの前での自己理解〔＝了解〕」や「テキスト世界と新しい存在」として語っていることとも符合する<sup>39)</sup>。リクールは哲学的聖書解釈について次のように結論づける。「信仰とは、テキスト世界を解釈しつつ、自分自身をもいつでも解釈されたいと用意している者の態度である。これが聖書的信仰の解釈学的決定となろう」<sup>40)</sup>。

このようにリクールはテキスト世界の解釈を通して、自分自身をも解釈されることを説いている。これは彼が繰り返し語る自己の「放棄」(désappropriation)に繋がる考えであり<sup>41)</sup>、「読み手として、私は自分を喪失することによってのみ自分を見つけ出す」<sup>42)</sup>ということにほかならない。大貫隆の表現を借りれば、「文学作品を解釈するとは、解釈者がこの『テキスト世界』の中で自分自身と世界を新たに了解し直すこと、この意味での『テキストの前での新しい自己了解』(une nouvelle compréhension du soi devant texte)を獲得することにほかならない」<sup>43)</sup>ということである。すなわち、「他者」である「テキスト世界」との「新しい自己理解〔＝了解〕」をその都

度起こされることが、リクールが言うテキスト解釈でもあるということである。

#### 4.4. 聖書主義の盲点

聖書主義は聖書に従い生きることを最も希求し、また実践してきたと言っているのだが、そこには高橋が言う「落とし穴」があったということは上述した通りである。確かに聖書主義は——そして教理的解釈を標榜する教理主義もまた——「聖書のみ」というプロテスタンティズムの聖書原理に最も忠実かつ敬虔に服してきたのだが、それと同時に先の高橋の警句が明らかにしたように、「神の言葉の他者性(距離)が忘れられることによって自分の都合の良い勝手読み、自分の言葉となる危険が付きまとう。神の言葉に批判され突き動かされるのではなく、自分を棚上げにして他人を裁くための錦のみ旗になってしまう危険」<sup>44)</sup>を孕むものであった。

もし仮に誰かが聖書主義を真に希求し、聖書主義に徹するとすれば、その人は聖書のすべての言葉をそのままその人の全生活を規定するものとしなくてはならず、聖書のすべての言葉に従って生きるということをしなくてはならない。その意味において、聖書主義とは、かの「聖書男」<sup>45)</sup>のようになることを求めるものだと言えるのかもしれない。むしろ、「聖書男」は聖書主義を真面目に演じることによって、その滑稽さをカリカチュアしたものではあるが、その姿からは、聖書主義というものが、実際には聖書のすべての言葉に服してなどおらず、聖書主義とは、謂わば「我田引水のな聖書の引用や実践でしかない聖書主義」、あるいは「恣意的な聖書の引用や実践でしかない聖書主義」にしか過ぎないということが明らかとなる<sup>46)</sup>。

その意味では、先に引いた高橋が言う「落とし穴」は、ド・マンが言う「盲点」(blindness)<sup>47)</sup>と通底するものだと言えるであろう。ド・マンは次のように言う。「ちょうど光が陰のなかに、真実が誤謬のなかに潜むように、一方は他方のなかに絶えず潜んでい

<sup>44)</sup> 上注 37 参照。

<sup>45)</sup> A・J・ジェイコブズ『聖書男——現代NYで「聖書の教え」を忠実に守ってみた1年間』阪田由美子訳、阪急コミュニケーションズ、2011年。原著はA. J. Jacobs, *The Year of Living Biblically: One Man's Humble Quest to Follow the Bible as Literally as Possible*, New York/London/Toronto/Sydney: Simon & Schuster, 2007.

<sup>46)</sup> この問題については、本論文「はじめに」を参照。

<sup>47)</sup> Paul de Man, *Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism*, Minneapolis: University of Minnesota, 1983 参照。

<sup>39)</sup> ポール・リクール『解釈の革新』(白水叢書 32) 久米博/清水誠/久重忠雄編訳、みすず書房、1978年、59-63、75-83、104-107、188-197、206-216頁、同『聖書解釈学』久米博/佐々木啓訳、ヨルダン社、1995年、162-169、169-185頁参照。

<sup>40)</sup> リクール『解釈の革新』82頁。

<sup>41)</sup> リクール『解釈の革新』63、196頁。

<sup>42)</sup> リクール『解釈の革新』196頁。

<sup>43)</sup> 大貫隆『福音書研究と文学社会学』岩波書店、1995年、114頁。なお、同『聖書の読み方』93頁をも参照。

る」<sup>48)</sup>と。ド・マンの指摘を援用すれば、聖書主義という光ないし真実は、それとは正反対の陰ないし誤謬と常に共棲しているということである。すなわち、聖書主義は聖書に忠実でありつつ、それと同時に聖書を自らの足下に服させるという正反対の態度を共棲させてきたということである。聖書を最も大切に、聖書に服従してきたはずの聖書主義が、それと同時に聖書を蔑ろにし、聖書をその足下に屈服させてきたのである。

そして、聖書主義が聖書を敬虔に読んでいるようでありながら、実際には固定化した聖書テキストの読みに固執し、そこから一步たりとも出ようとはしていない現実が露わとなる<sup>49)</sup>。しかも、高橋が指摘した「神の言葉に批判され、突き動かされる」経験、すなわち聖書テキストから自己が変えられる強烈な「不意撃ち」を見舞われ、聖書という「テキストの前での新しい自己理解〔＝了解〕」をすることで、自己の「放棄」へと連なる読み行為や実践をしていくことが阻害されているのである。おそらく、これは聖書主義に運命的につきまといっている限界であり、そしてこれがまさに「聖書主義の盲点」と言えるものなのである。

##### 5. まとめ——聖書解釈における他者性の認識

本論文で論じた内容は以下の通りである。

- (1) ルターが用いたプロテスタンティズムの聖書原理である「聖書のみ」は、歴史的にはローマ・カトリックの教皇首位権に対する抵抗<sup>プロテスタ</sup>を目的として、教皇権を相対化するために新たな絶対的権威を提示するという巧妙な戦略であったと考えられる。
- (2) 「規範化する規範」とされている聖書正典は、歴史的には正統主義教会が異端と見なす者たちを排除するために、外在的な「使徒的」という「規範」を設けて決定したものであり、したがって聖書はあくまで「規範化された規

範」でしかなく、それゆえ聖書を「信仰の規準」(正典)とする立場もまた、ひとつの立場に過ぎず、聖書もまた他のテキストとまったく同じひとつのテキストとして、解釈の俎上に乗せられてしかるべきだと言っているのである。

- (3) エーコとバルトの「開かれた読み」、バフチン、ウィトゲンシュタイン、レヴィナスの「他者性」、デリダの「差延」、ド・マンとヒリス・ミラーの「読解不可能性」、ジョンソンの「不意撃ち」、リクールの「テキスト世界の前での新しい自己理解〔＝了解〕」といったテキスト解釈を概観することを通して、聖書主義の読み行為は、高橋が警句を発しているように、まさに決定的に「他者性」が失われているのであり、そこには「循環的解釈」「対話の喪失」「独我論/独話」といったものが木霊していると言えるのである。
- (4) 確かに聖書主義は「聖書のみ」というプロテスタンティズムの聖書原理に最も忠実かつ敬虔に服してきたのではあるが、ド・マンが「盲点」として示唆したように、聖書を最も大切にしつつ、聖書を最も蔑ろにしてしまう事態を惹き起こしており、正反対の態度を共棲させてしまうという「聖書主義の盲点」を抱えていると言えるのである。

そして、このようにまとめたことに一言展望を付け加えるならば、聖書解釈における他者性の認識の有用性とは、「神の言葉に批判され、突き動かされる」経験、あるいは聖書テキストから自己が変えられる強烈な「不意撃ち」を見舞われ、「テキストの前での新しい自己理解〔＝了解〕」を不断に引き起こすテキストの前での開かれた姿勢を持つことを措いてほかにないと言っているのである<sup>50)</sup>。その意味において、聖

<sup>48)</sup> de Man, *Blindness and Insight*, 103.

<sup>49)</sup> その意味において、繰り返し読むことを求められる聖書というテキストを読むうえでは、そのとき大切だと感じた箇所を線を引いたり、そのときの感動や感想を書き込んだりする行為は、そのとき経験した「不意撃ち」ないし「新たな自己理解〔＝了解〕」を記録し、後に追体験するためには有効だが、かつての「不意撃ち」ないし「新たな自己理解〔＝了解〕」が強烈であればあるほど、次に同じテキストを読むときに、そのテキストの「他者性」が失われてしまい、新たな「不意撃ち」や新たな「自己理解〔＝了解〕」を経験することを阻害してしまう危険性がつきまといっていると言っているのである。

<sup>50)</sup> なお、日本においても、テキストの他者性の認識を阻むものがある。それは学校教育における「国語」(日本語)である。国語(日本語)教育が旧来の文学理論を踏襲しているがゆえに、テキストの他者性が等閑に付され、多様な読みが封殺されてきたと考えられるのである。このような国語(日本語)教育の実情について、ひとりの高校生(当時)が次のような想いを率直に述べている。「例えば『この時の著者の心境を書きなさい』とか、文章を切り刻んで解剖されているような気がするの。そんな心境なんて、はやく原稿終わればいいな、かもしれないし、今日の晩ごはんは何かな、かもしれないじゃないか!とひねくれた考えをしなくなってしまう」(平松花梨「もっと読みやすい環境を作ってよ」、『季刊「ばろる」』創刊準備号、パロル舎、1995年、17頁)。

ひねくれなどではない。確かに、このような疑問や批



書の他者性の認識は、「正典」(canon)として聖書を読む立場にだけ必要なのではなく、「古典」(classicus)ないし普通の「書物」(biblia)として聖書を読む立場にもまた不可欠なものだと言っているのである。

---

判を授業中に述べたり、試験の答案にこのように書いたりすれば、国語（日本語）教師はその生徒をひねくれ者として扱うであろう。だが、彼女のこの批判はテキストを自由に読解し、解釈することを阻む国語（日本語）教育の問題性を露わにするものであり、テキストに著者が意図した唯一の意味があるとの幻想を率直に疑問視するものでもある。

文学テキストを楽しむとはそれを味わい読むことであって、著者の意図をなぞるといふ努力に収斂されるものではない。国語の試験における著者の意図をなぞるといふお決まりの出題。これは正しい読みだから「○」（正解）、それ以外は間違いだから「×」（不正解）。答えが決まっている読み。このような日本の国語（日本語）教育は、まさに読み手（解釈者）の一方的意志によってテキストを統一原理に掠め取ってしまうヘーゲルの解釈の普及版であり、ここに日本においてテキストの他者性が等閑に付される一大要因があると言っているのである。

実際に、国語（日本語）の入試問題において、作家の作品を取り上げ、その作品における著者の意図を問う出題がなされるさいに、その作品の著者がその入試問題を解こうとすると、出題にある選択肢のなかに著者である自分の意図と合致するものが見出されず、その選択肢のなかから答えを選んでみたものの、入試の正答は別の答えであり、不正解となったことが報告されている（HP「穂高健一ワールド」の「小説家」の項目内の「共通一次試験『国語』、作者が解けず腹が立った〈黒井千次（作家）〉」= <http://www.hodaka-kenich.com/Novelist/2014/04/19224346.php> 参照）。

それと同様に、教理や注解書の読みが「○」（正解）、それ以外は「×」（不正解）という答えが決まっている聖書解釈の安堵感。しかし、その安堵感を粉碎するのがテキストの他者性の認識である。著者の意図という呪縛によって読む快樂ないし読むことにおける感性を剥ぎ取られていくことに対する先の高校生の透徹した批判。彼女の批判は、「国語」（日本語）教育の問題を超えて、著者の意図を探る編集史を重視する歴史批評を標榜する聖書学に対する鋭利な批判ともなると言えるのではなからうか。